

荒川の大洪水（江戸時代）

～未曾有の被害をもたらした寛保2年の大洪水～

先人たちが崖標や碑、絵画等で現在に洪水の記録を伝えています。



寛保洪水位磨崖標



草の茂みと苔で岩肌の文字は読みにくくなっていますが、「水」の文字ははっきり読めます



寛保洪水位磨崖標のすぐ上にある圓福寺から国道140号線を望む。この視界のほとんどが水没したことになります



右岸から寛保洪水位磨崖標がある左岸を望む。赤い線あたりまで水がきたことになります

寛保洪水位磨崖標

江戸時代に関東一円を襲った大洪水の最高地点を示す崖標。1742（寛保2）年、旧暦7月27日から4昼夜にわたって続いた豪雨は、関東各地に未曾有の被害をもたらしました。8月1日、荒川の水位は最高点に達し、長瀬町野上下郷一帯の建造物はことごとく水没しました。後日、地元の有志四方田弥兵衛、滝上市右衛門によって、この岩壁に大きく「水」という文字が刻まれました。その下には「寛保二年壬戌年八月亥刻、大川水印迄上、四方田弥兵衛、滝上市右衛門」と刻まれています。現在は、削落し「水」以外は判読が困難となっています。この「水」の位置が当時の水位の最高点です。その高さは約18m、現在の国道140号線の路面から約4mもの高さに達します。寛保洪水位磨崖標は、荒川の洪水の歴史を辿る上でも貴重な記録と言えます。

▶ 江戸時代以降から今の荒川で増えた洪水

荒川はその名の示すように荒れ川であり平常時の水量は少なく、一たび豪雨となれば濁流滔滔（だくりゅうとうとう）として幹・支・派川は溢流し豊穰たる穀倉や集落を流亡させ、多くの人畜の命を絶ちました。

未だ河道の定まらない時代において奔流は至る所に乱流し、惨憺たる災害を招きました。

荒川の河道は江戸時代以前は現在の元荒川筋を流れており、当時は元荒川沿いに水害が頻発していました。現在の荒川の沿岸の水害がより著しくなったのは江戸時代になって1629（寛永6）年の久下開削による河道の付け替えが行われてからといわれています。

荒川の水が入間川に入れられる前は入間川自身の流量は小さいため被害らしい被害はありませんでした。既往年間の代表的な水害の記録を見ると360年間に実に150回を数えます。2年半に一回の割合です。

▶ 1742（寛保2）年大水の洪水位碑が残る境内

川越市の久下戸氷川神社にも、寛保洪水位標があります。その昔、この水位標のところまで大水が出たことを教えてくれているのですが、そもそも当地の偉人である奥貫友山の『翁大水記』の中に、奥貫家縁側及び氷川社石灯籠を典拠に水位を記録した箇所がありました。

これをもとに、川越市教育委員会が実測したところ、1742（寛保2）年大水の洪水位は標高9m50cmで、久下戸氷川神社境内にある富士講山の頂上がこれにあたると推定しました。このことを永く後世に伝える為に、記念の碑を建立したそうです。

また久下戸氷川神社には、1811（文化8）年、正月に奉納された4間の術と答えが附された73cm×170cmの算額もあります。



記念碑（左）のグレーの線が洪水位になります

▶ 異常な水位となった1859（安政6）年の洪水

江戸時代の記録に残る大水害としては、1859（安政6）年の洪水も挙げられます。

7月25日の洪水で、荒川筋の切れ所は菅沼村2箇所、広瀬村1箇所、熊谷宿南5～6箇所、久下3箇所、大曲1箇所、田間宮村4箇所、箕田村数箇所、中曽根村2箇所、その他1箇所、計20数箇所を数えました。

入間川筋では18箇所、越辺川筋で7箇所、成木川筋5箇所、都幾川筋5箇所、綾瀬川筋3箇所、高麗川筋3箇所、柳瀬川筋2箇所、その他2箇所、合計60数箇所で決壊しました。



上) 安政6年出水の図（坂戸市）
左) 安政6年の洪水位を示す石垣

アクセス

寛保洪水磨崖標（左）

交通：秩父鉄道「樋口駅」下車、徒歩約3分
住所：埼玉県秩父郡長瀬町野上下郷1010

久下戸氷川神社（右）

交通：JR川越線「南古谷駅」下車、徒歩約30分
住所：川越市久下戸2785



寛保洪水磨崖標



久下戸氷川神社